

『徒然草』第二百二十八段の「院」なるお方について

大 坪 利 絹

一

雅房大納言は、才かしくよき人にて大将にもなさばやおぼしける比、院の近習なる人、たゞ今浅ましき事を見侍りつと申されければ、何事ぞとゞはせ給けるに、雅房卿鷹にかはんとて、いきたる犬のあしをきり侍りつるを、中墻の穴より見侍りつと申されけるに、うとましくにくくおぼしめして、日來の御氣色もたがひ昇進もし給はざりけり、さばかりの人鷹をもたれたりけるは思はずなれど、犬の足はあとなき事也、虚言は不便なれども、かゝる事をきかせ給て、にくませ給ける君の御心は、いとたうとき事也、——後略——徒然草第二百二十八段

右の「院」或は「君」なるお方がどなたを指し奉るか古來說が分れているところである。そこで以下古來の主な説を挙げ、それらを参考にしながら私の考える所を述べてみたい。

一「後宇多」をさすとする説

浅香氏山井輯の『徒然草諸抄大成』に、「此院は後宇多院なるべ

し。此の時院御所三院あり。後深草、龜山、後宇多、但し後深草、龜山は雅房大納言の時分は法皇なりし」とある。これは『壽命院抄』や『文段抄』の説を引いたもので、明治以後の新注でも後宇多天皇（内海）・後宇多上皇（沼波・藤田・塚本・佐野・武田・山田孝・佐々木）と皇号を細別しているが同一人を申し上げている事にかわりはない。『田辺賢』徒然草諸注集成・峯村文人・三谷栄一『徒然草解釈大成』ニヨル。以下両書引用ノ場合、『集成』・『大成』ノ略号ヲ使用スル」

この後宇多院説は、次の伏見院説や後伏見院説が出されてから後にもなお有力で、最近の木藤才藏氏の新潮日本古典集成（昭和52年3月）の『徒然草』でも後宇多院説を有力とされていて、現在では最有力説と言い得る。

二「伏見」をさすとする説

黒川由純『徒然草拾遺抄』に見える説で、新注では吉川秀雄氏が支持され、雅房大納言の時、永仁六年八月までの後深草院の院政、同年八月から正安三年正月までは伏見院の院政、その後は後宇多院の院政である、ここに「院」とあるのはおそらく伏見院のことであ

ろう、と言われている。『集成』・『大成』ニヨル

三「後伏見」をさすとする説

橘純一氏が出された説で、氏は『正註つれど草通釈・中巻』に「この段の院がどなたであらせられるかについて」という一文を設けて、概要次のように断定せられた。即ち、皇室・重臣・貴族等の尊貴に対する称号法は、同じ時代にあつては社会的約束による固定性を持ち、特に皇室に関しては既に崩御のお方に対しては崩後に定まった御号で申上げるのが慣例であり、徒然草執筆時点に於ては、伏見院や後宇多院を指し奉る時は、正にそのままに伏見院・後宇多院と申すべきで、単に「院」という如き称し方はしない。ただ崩御後まだ日の浅い時点では「故」という接頭語を使用することもあり得、当段から八段あとの第百三十六段に「故法皇」と申上げのお方は年代との関係上どうしても後宇多法皇でなければならず、『寿命院抄』以来の萩原院(花園院ノコト)とすれば徒然草執筆があまりに兼好の晩年になり、他の段との記事の関係上種々の矛盾が生ずる。それで第百三十六段より僅に八段まえの当段で、もし同じ後宇多院を申上げようとすれば、やはり「故法皇」か「後宇多院」と申上げねばならぬ筈である。ところで当段の執筆は第百三十六段の故法皇が後宇多院なることの確定的事実と考えるべきことと相関して、(更に第三十三段の「今の内裏」が二条富小路内裏焼亡の建武二年正月以前なることと相関して)、後宇多院崩御後と考えねばならぬから、当段の「院」が後宇多院でないことも確定的である。次に、「伏見院」とすることも、伏見院は後宇多院より七年前に崩御されており、その称号も「新法皇」であるから故を冠すれば「故新法皇」となり「故」と「新」とが矛盾感を与える熟さぬ称号となる。

そこで「故院」と申上げるか、そのままに「伏見院」と申上げるのが妥当である。ただ「院」とだけ申して伏見院をさすことは、元弘三年六月落飾あつて法皇と称せられるまで院と称せられた後伏見院と混同せられるから、「院」と申上げる道理がない。なお又、元弘三年六月から建武二年十一月まで約二年半、院と号せられた花園院との混同のおそれもあるのである。それ故、当段の「院」はどうしても後伏見院でなければならず、正和二年十月伏見院御落飾後元弘三年六月まで二十年間の長きにわたつて後伏見院は「院」または「一院」と号されており、兼好がこの間に(兼好三十一歳乃至五十一歳)当段を執筆したと見ればよく適うのである。こうすれば当時の人が徒然草を読んで、何の曖昧の感を持たず、兼好と共通の理解をしたに相違ないと思われるのである。以上が橘氏説の概要で、院とは後伏見院をさすと断言せられたのである。

四「伏見」または「後伏見」をさすとする説

斎藤清衛氏『徒然草の新しい解釈』の説で、雅房の正大納言在任中、院には伏見院、後伏見院が在任されたが、その何れかを定めがたい。とされた。(『大成』ニヨル)

五「龜山」をさすとする説

安良岡康作氏『徒然草全注釈』の説で、私もこの龜山院説に賛成の立場に立つ。ただ龜山院とする論拠にもう一つ別の理由を加えただけであるが、安良岡氏説の補強ともなばと思つて以下述べるのである。

二

龜山院説を述べる前に、現在の最有力説である後宇多院説の論拠

の概要に触れ、私見を述べてみる。

雅房は、「才かしくよき人」という人柄であった故に、「院」なるお方は「大将にもなさばや」と思召したのであるが、雅房は、大納言に任ぜられて後、大将に兼任され得る機会はあるにありしや否やが問題である。検討するに、永仁五年十二月内大臣源通雄が左大将を辞任し、右大臣師教が左大将を兼任、同六年四月辞任している。その時点での右大将は公衡で、公衡も永仁六年九月辞任。それ故、雅房にとって永仁五年十二月、永仁六年四月、永仁六年九月に、左右いずれかの大将に兼任される機会が存在した。(雅房が大納言に任ぜられしは永仁五年十月)。次に正安元年四月、権大納言左大将冬平は内大臣となったが、左大将の還宣旨を賜わり、正安元年八月大将を辞任。従ってこの時点でも機会があったのである。(しかし、実際には雅房は機会を逸し、雅房が死去するまで、左大臣は内夷であった。)[以上『集成』ニヨル]そこで、右の三つの機会に於ける尊貴を示すならば、

○永仁五年十二月および同六年四月

天皇 伏見

上皇 後深草(本院) 龜山(中院) 後宇多(新院) 「『一代要記

癸集』

○永仁六年九月および正安元年四月

天皇 後伏見

上皇 伏見 後深草(以上持明院統) 龜山後宇多(以上大覚寺統)

「『一代要記癸集』オヨビ大森金五郎・高橋昇造『最新日本歴史年表』ニヨル」

の如く、五人の尊貴(後深草以外は前節で列举されたお方)がおら

れ、「大将」の任命権がどなたにあったかをしばらく措けば、これら五人のお方が雅房を「大将にもなさばや」と思召す事自体の蓋然性は、すべてのお方にあるわけで、(その為前節に紹介したように論がわかれたのであろうが)、任命権すなわち御勢力の強さを考えた時も次の如き諸意見が出たのであった。

即ち、佐野保太郎氏は、この五人の中後深草と龜山の二院は法皇であらせられ、当時最も勢力のあった方は後宇多院であったからして、此所にいう「院」はおそらくこの「後宇多院」であろうと思うとされ(『大成』ニヨル)、山田孝雄博士は「雅房の大納言時代は伏見後伏見両院の御時として六年にしてこの時の院は伏見院なれど、大将になるべくなれるは恐らくはその末の後二年後二条院の御代にして後宇多院の政なれば、この院は後宇多院なるべし」とされた。山田孝雄博士説の後半部は、高乗勲氏「徒然草研究」にも所引する閑寿「徒然草集説」の、「今云、此時後二条の御代の比なるべし。其此院の御所三方おはします。後深草、龜山、後宇多也。然れ共後宇多の院は後二条の父帝なれば、後二条御即位十七才にて若くまします故、院中にて父帝政務をきこしめして、後宇多を院の御所と申奉りし比の事なるべきにや。すぐに其時のとなへにて、院と申けるは後宇多の院の御事なるべし」に拠られたのであろうが、高乗氏は、さきの橋氏説を斥けた後、雅房が大将にもなり得る地位にいた頃、即ち大納言就任時から少し時を置いた頃——『集説』にいう後宇多院の院政の頃とされた。ここで私見を挿むならば、佐野・山田・高乗各氏の御説は、雅房の年齢地位等からは首肯できるのであるが、後宇多院の勢力の強さという面のみから考えられて「院」なる方と雅房との個人的な親疎の面があまり考慮されておらず、換言すれば

「大将にもなさばや」と思召される程の親愛や信頼の關係にあった事を説明されていないのが、私には稍不安に思われるのである。

そもそも「大将」に「なす」にはなすだけの条件と言おうか、慣習と言おうか、当時の社会に一般に承認されていた通念と言うものがあつて、その上に親愛や信頼やもしくは政略等の要素がからみあつて実現したものと思われるのである。さすがに古注はこの点をも考へて「職原鈔」などを引用して加注している。即ち「諸抄大成」に諸注皆同じとして、

○近衛大将なり。武官の統領なり。大納言の大将を兼官するを手柄とす。

と述べて、大納言兼大将が當時にあつては「手柄」とすべき名譽なることを言い、又、

○非譜代之華族者更不任之。多是大納言中譜第上臈任之。又云、任大将二人其職掌大略同大臣只守位次着座許也。其内外作法不混余人者也。

と「文段抄」は加注し、通念上は、大納言に至つた者の中、しかも譜代の上臈たる華族、即ち清華の家門から選ばれることを指摘し、職掌も大臣に匹敵し、只宮中着座は大臣より下であるにすぎないとするのであつた。従つて雅房の家柄(後で詳述するが)を別にするとしても、彼の大納言任用後に当段叙述の件がおこつたと考えるのが穩當で、武田祐吉博士「徒然草新解」の如く、「御氣嫌を損じたのは弘安ころのことであろうか」「大成」ニヨルとされるのは如何かと思われる。(弘安八年に雅房中納言、永仁三年権大納言、正大納言は永仁五年であつた)。

以上、「院」を後宇多院とみなした諸説を見てきたが、それは当

時の最高権力者が後宇多院であつたから、雅房の大将任命も又後宇多院の他は考えられぬとされたようで、「院」なるお方と「雅房」とを直接個人的な關係で結び付け得るような傍証は示されないままに論が進められてきた模様である。

三

そこで、次に雅房および土御門一門に關して拙論に必要な事柄を簡単に述べておきたい。雅房は古注以来示されている如く、源定実の長男で、家門は土御門家である。乾元元年(正安四年)四十一歳で薨するが一門の将来を彼に期待していた定実は悲歎のあまり落飾した程の人物であつた。ところで土御門家は古くから所謂「精選の家」と称せられる家柄である。精選の家とは、東宮傳・東宮學士・春宮坊などの官職に就き得る家柄の良き一門を云うのであつて「參照土田直鎮「官職制度の概観」・岩波古語辞典」、土御門家は正にその家柄に該当する。今、「拾遺抄」に引く系図に拙論関連人物を加えてそれを示せば次の如くである。

○村上天皇—具平親王—師房—顯房—雅実—雅定—雅通—通親—定通—顯定—定実—雅房—雅長

親定—親實—親賢

右系図の人物中、土御門通親は順德天皇春宮時の東宮傳、その子定通も順德帝を守成親王と申上げた東宮時の春宮權亮、顯定のみは中宮權亮であつたが、その子定実は後宇多天皇春宮時の春宮大夫であり、次の雅房・親定兄弟は兄雅房が後二条天皇春宮時の春宮大夫、弟親定が伏見天皇春宮時の春宮權亮であつたのである。つまり、雅

房に至る土御門の家系はその殆んどが東宮職に勤仕し、特に定実・雅房父子は、大覚寺統の春宮大夫であったことは、徒然草の当該理解上十分に留意しておかなければならぬ点である。そして春宮大夫や春宮権亮は、大納言や中納言の中から任用せられるのが慣例であったから「近衛大将」を「大納言」と兼任することが名譽とされた社会通念とも関連して、大納言の雅房が「大将」になることは更に「手柄『諸抄大成』の諸注」となるべき条件であったわけである。

ところで雅房は右に見たように大覚寺統に勤仕した人物であつて、その雅房を、持明院統であらせられる伏見院もしくは後伏見が「大将」に任用せられようとしたと考える諸説（さらに説としては出されてはいないが、後深草院も同様である）は、この点からも疑念を挿む余地が存するのではなからうか。殊に強く「後伏見院説」を主張された橋純一氏の見解には、この点以外でもつぎの如き批判があるのである。即ち「橋説は、執筆時を基準とし、統後拾遺（嘉暦元年）との一致から、院とは後伏見と推定されたのであるが『拙注、橋説デハ統後拾遺トノ一致ニツイテハ、直接言及セラレテイナイ』その点では、〈後宇多院〉とあるべき称が、故法皇とあつたりして、必ずしも同一とはいえない。ただ〈院〉とある第二十七段「院にはまるる人もなきぞ」は花園新院、第四十八段「院の最勝講奉行して」は、光親から推定して後鳥羽、第五十段「院の御棧敷のあたり」は伏見上皇か、第六十二段「院へまるる人に」は後嵯峨、いずれも、執筆時から判定したものとは考えられず、もっぱら記事内容からの記述と見られる。（田辺爵氏『集成』の説）がこの批判説なのである。

一体、土御門家における近衛大将兼任の問題は、ただに雅房の時

代に生じたものではなく、その祖父の顕定の時にまで遡り得る。即ち『増鏡』「おりある雲」の巻に「後土御門の内大臣定通の御子の顕定の大納言、大將望み給ひし云々」とあつて、祖父顕定が、大納言と大將との兼任を希望して以来のことである。この時は「後深草院建長七年四月十二日の除目に、顕定、右大將望みたりしに引たがへて、藤原公基を任せられしかば、その恨にたへずして、即夜出家し、高野に籠れるが、その後、後嵯峨院御幸の時、かの庵室をたづねさせ給へりしに、跡をはらひて桂の葉室の山荘へにげのぼりし云々（和田英松博士『重修増鏡詳解』の解説）」という結果になり、顕定の大納言・大將兼任は、実現を見なかったのであり、土御門家（源氏）にとっては藤氏一門におさえられて残念に思ったのであるが、顕定の子定実の時になって太政大臣になり、面目をほどこすのである。即ち「拾遺抄」も指摘するが、『増鏡』「つげの小櫛」に「土御門の前の内大臣定実、六月に太政大臣になり給ふ。いとめでたし。故大納言入道顕定の本意なかりし御おもておこし給へる。いとゆゑし」とあるのがそれで、この定実は「院（龜山ナリ）の御おぼえの人なるうへ、才もかしこくおはす（つげの小櫛）」人であつた。つげの小櫛には続けて「御子の大納言雅房、中納言親定とて、いづれも才ある人にておはしき」と述べてあり、定実・雅房父子と龜山院とは相当親しい関係にあつたことを思わせる書きぶりである。定実と龜山・後宇多父子との「切実な関係（安良岡氏ノ用語）」として、安良岡氏はさらに『増鏡』「あすか川」の巻を挙げておられる。即ち文永十年夏、龜山天皇の春宮（後宇多）が黄疽の如き症状になられ、修法も効めなく医師も困じ果てた頃、龜山帝は春宮灸療の先例無きを押し切つて、定実と医師の二人だけを療室に入れ、ただ三人

のみで灸治の事に当られたことがあった。事の成行如何によつては皇位継承問題(当時ハ兩皇統迭立トイウ時期)にも發展しかねない春宮死活の現場に、特に勅命によつて余人を除いて参入せしめられたのであるから、まさに「切実な關係」以外の何物でもなかったであろう。なお安良岡氏は別に、『統史愚抄』十二(後二条天皇ノ正安三年カラ乾元元年マデ)に、後深草を「法皇一院」、龜山を「法皇院」、後宇多を「一院」、伏見を「中院」、後伏見を「新院」と書き分けてあることを指摘され、田辺爵氏もその使いわけを系図表示の肩付に示されている『集成』。つまり、正安三年から乾元元年という時点では「院」は龜山ということを示されたのであろう。

以上、土御門定実(とその子雅房)が龜山院とは相當に親しく、信頼のある關係であることを見てきたが、雅房と龜山院とを結ぶ「キメ手(安良岡氏の用語)」とまではいかず、雅房を「近衛大将」に昇進させる積極的な尊貴としては、後宇多院よりも龜山院の方が有力ではなかったかというに過ぎず、ここでもうしても雅房と龜山院とを直接的に結ぶ傍証が欲しいところなのである。

四

龜山院と雅房とを直接結びつける傍証として、私は次の事例はどうかと思うのである。これは徒然草当段の考察の目的で見出したものではなく、『龜山院御集』の調査の副産物として偶然見出したものである。

世に『龜山院御集』なる歌集があることは、現在では周知の事であるが、この御集は書陵部にある一本が天下唯一の孤本であつて、明治四十三年佐佐木信綱博士に拝覧の許可が下りるまでは全く世間

に知られていない本であつた。その詳細は、昭和十九年刊の同博士の『国文秘籍解説』に詳しいが、大正四年和田英松博士によつて『列聖全集』が刊行せられ、その時、この御集も活字翻刻せられて一般世人にも比較的容易に拝見できるようになった。併しこの時は、後述する如く御集の全部が翻刻せられず、御集巻末の二組の贈答歌のみは省かれてしまったのであるが、昭和三十六年に至つて桂宮本叢書に再度活字翻刻せられるに及び、この省略部分も採録せられてここに完全な形の御集を容易に拝覧し得る事になった。

ところで何故『列聖全集』に翻刻の際省略せられたのかと云うと、それはきわめて簡單明白な理由によるものらしく、つまりその二組の贈答歌には、いずれも龜山院御製がふくまれていない為と判断されたからである。又、桂宮本叢書の場合は採録されてはいるが、なぜ採録したかという理由はその解説にも触れられてはいない。同一原本が時を置いて翻刻せられて、その翻刻に違いが生じているのであるから、何等かの説明が欲しい所であるがそれが無い。おそらく桂宮本叢書の場合は、原本のまますべて翻刻化しておこうという配慮の下になされたのであろう。私はこの両者の翻刻方針のちがいに疑念を持って調べた結果、この二組の贈答歌のうち一組は、どうも龜山院と雅房との贈答ではないかと考えるようになり、もしこの考えが正しければ、ここに龜山院と雅房とを直接結びつける事例を提示し得る事になる。詳細は拙論『風雅和歌集論考』所収「龜山院御集」の成立期と編者(桜楓社刊)に譲るが、その時は徒然草第百二十八段との関連については迂濶にも気づかず全然触れなかったので本稿で改めて述べる次第である。

そこで、問題の『龜山院御集』末尾の二組の贈答歌をふくむ部分

全部を示すと次の如くである。

亀山院御製にあらずといへとも其奥に被注付候間同注之

後二条院くらゐにまし／＼ける時 八月一日花立に松の枝をた
てられて故大納言に下賜ける御哥

常葉なる松をためしに契置て きみにつかへむすゑはかきらし

御返事に硯をたてまつりけるふたに丁子を入れて石菖そへたる石
をすゑてたてまつるとて読侍ける

雲かゝるいはほとならんひさしさを まつもかひある君か御代か
な

親賢上階ののち 叙留の事とこほり侍しに いつまてとまつ
に心をつくしてもねはなかけり子をおもふ鶴 と申て侍ける
御返事に 伏見院

よるのつるのころはさそとおもひやれとなくねかひある時をま
たなん

(桂宮本叢書翻刻による。省読点)

さて、右の冒頭の「亀山院御製にあらずといへとも其奥に被注付候間同注之」という注記は、『御集』の祖本にはなく、この祖本を底本として書写したのが書陵部本(その書写は江戸初期と解説されている)であるが、この書陵部を書写した者が書き加えた注記であろうと私は考える。書陵部本書写者がこの二組の贈答歌を深く考察もしないで「亀山院御製にあらず」と考えたのである。が、祖本の奥には明らかにこの二組の贈答歌は書き記されてある。この事実は動かすことのできぬ事実である。そこで書陵部本書写者は、「……

といへとも其奥に被注付候間同注之」と断わった上で、この二組の贈答歌を書きつけておいたのである。ところが『列聖全集』はこの江戸初期書写者の注記をそのまま信用して、亀山院御製でない歌をその御集に加えることはないと考えたのであろうか、併し江戸初期書写者の執った態度とは全く逆に、これを全部省略処分にしてしまわれたのだらうと私は思うのである。

ところでこの二組の贈答歌には、果して亀山院の御製はふくまれていないのであろうか。前後二組の贈答歌中、後の一組は親賢なる人物の親と伏見院の贈答歌なることは容易に推察できる。この事は前記拙稿に詳しく述べたので茲では再説しないが、一二の留意すべき点だけ記せば、「親賢」は本稿第三節に引いた土御門家系図中の人物で、本稿当面の人物たる雅房の弟、親定の子である。従ってこの贈答は、親定がその子親賢の位階昇進後、官職がもとのままで上進せぬ(コレヲ叙留トイウ)のを心配して、かつてその春宮時代に自分分は春宮権亮として勤仕した伏見院に歎願した贈答歌なのであった。「コノ伏見院ノ答歌ハ、昭和十八年刊『伏見天皇御製集』ニモ収録サレテイナイ新出歌デアル。」また、この贈答歌が行われた時期は、私は親賢叙留と親定没年という点から推考して、正和三年十月二十二日から正和四年七月二日の間としたのであった。従ってこの贈答歌は親定と伏見院のものであって明らかに「亀山院御製にあらず」なのであるが、前の贈答歌はそうではないであらう。

その詞書に云う「後二条院くらゐにまし／＼ける時」というのは『皇年代略記』その他の史書によれば、正安三年三月二十四日即位の日から徳治三年八月二十五日崩御に至る約七年間である。この後二条天皇即位に関しては、所謂大覚寺持明院兩皇統迭立という問題

贈歌を下賜されたお方は、故大納言よりも上位の人物である事は、詞書の敬意表現から明白であるが、それは故大納言なる人物を考察した上で推測する方が早道かと思われる。そこでこの故大納言をまず推定しなければならぬが、詞書から考えて、後二条帝在位期には生存しており『龜山院御集』（祖本）の編集期には故人であることが一つの条件となろう。さらに後二条が帝位に即かれることを喜ぶ立場に在る人で、特に兩統迭立にからませれば、大覚寺統の皇位回復を衷心より祝福し得る人物であらねばならぬであろう。（この場合、故大納言から追従的に歌をお贈りしたわけではなく、尊貴からわざ／＼故大納言に皇統回復を寿ぐ歌を下賜されたという、贈答の場ということをふまえておくべきであろう）。その上あとの一組の贈答歌、これは前述した通り、龜山院をふくむ歌ではなかったのであるが、それが何故『龜山院御集』の巻末に注付けられたのか、でき得るならばその点にも解明の光を与え得るような人物であれば一層よいわけである。今こういう三条件を満たすような人物を「故大納言」として置く。

父親定の兄に当るから『御集』を編集した親定としては、兄雅房

の贈答歌をこの『御集』の末尾に「注付」たと考えられるからである。(『御集』の編者についても従来から未勘のままであったが、私は前記拙論で親定と考えた。)

次に雅房に歌を下賜された尊貴がどなたであるかが問題であるが、贈答歌の歌意内容から考えて、持明院統に属する尊貴でない事は当然であろう。(即ち、徒然草第二百二十八段の「院」なるお方に従来擬せられてきた人物でいえば、伏見・後伏見ではないし、擬せられてはいないが同じ持明院統の後深草でも勿論ないわけである。)とすれば後二条帝の父の後宇多院か、祖父の龜山院かの御二方にしぼられるのであるが、そして贈答歌の歌意内容からすればそのどちらであらせられてもよいのであるが、私はこの贈答歌がほかでもない『龜山院御集』の末尾に注付けられている事実から考えて、その『御集』編集の当時にあつては、この歌は龜山院御製である事が歴然としていた為と思うのであり、又贈答歌の内容である大覚寺統皇位回復の祝寿という点から考えても、大覚寺統の始祖であらせられる龜山院の方がより適切とも思うのである。即ち雅房に下賜せられた尊貴は龜山院その人だと考えるのである。さらにもう一つの理由がある。それはあとの贈答歌の詞書に出る親賢なる人物の母、即ち親定の妻は、源重遠の女で、彼女は右衛門佐局と称し、龜山院女房として院に勤仕した女房で、後宇多院御製よりは龜山院御製の方を集録しやすい位置にいた人物であった。このような理由で私はこの下賜された尊貴は後宇多院よりも龜山院とみる方が一層妥当なりと考えるわけなのである。

そこで徒然草の第二百二十八段にもどれば、「院」なる御方が雅房を「大将にもなさばや」と考えられた事に、この贈答歌を重ねあわ

せれば、龜山院と雅房は親しい間柄として直接に結びつくのではないかと思われてくるのである。ただ一つ「大将にもなさばや」とお考えになられながら、何故それが取止めになったのか、そこには兼好法師が当段に於て述べたようなことが原因であつたからである。うが、龜山院御自身非常に感情の起伏に左右されやすい御性格の持主であつた為とも思われる。徒然草当段に於ても「大将にもなさばや」と思召されながら、近習の「いきたる犬のあしをきり侍りつる」という虚言をきかれるとすぐに「にくませ給ふ」という態度に交つておられる。勿論そこには兼好もいうように残虐を惡とせられる慈悲の御心と、禁制に触れる行為(安良岡氏「徒然草全注釈」所引の三浦周行博士の「新制の研究」数条、即ち弘安新制に「一牛馬数疋不可亦飼、況乎鳥獸一切莫飼之」・弘安八年新制「一可停止於洛中飼鷹鷄事」「一可停止集飼無用鳥獸事」・建久新制第三十六条「一可禁斷殺生並京中寺社近辺飼鷹鷄事」)に対する戒めの御心がはたらいた為もあつたであろうが、又一方には『大日本史』も指摘することく、「帝早好内、年十三始生子、及長寵嬖日多、幸御無度」であるかと思えばたちまちに「勉強精修、不復近婦人、行履一如僧」と急変し、而して又「而帝復敗德、淫縱益甚云」(卷八十三「后妃十」というごとく変転急速なる御性格であつた為とも私には思われ、徒然草当段は、この龜山院の御性格とも頗る合致する記事内容でもあるから、私はこの段の「院」は後宇多院とするよりも龜山院と考えられた安良岡説に全面的に賛意を表したく思う次第である。拙論は、安良岡氏の言われる「キメ手」には程遠い説ではあると思うが、敢えて『龜山院御集』との関連を指摘して、立論の骨子とした次第である。